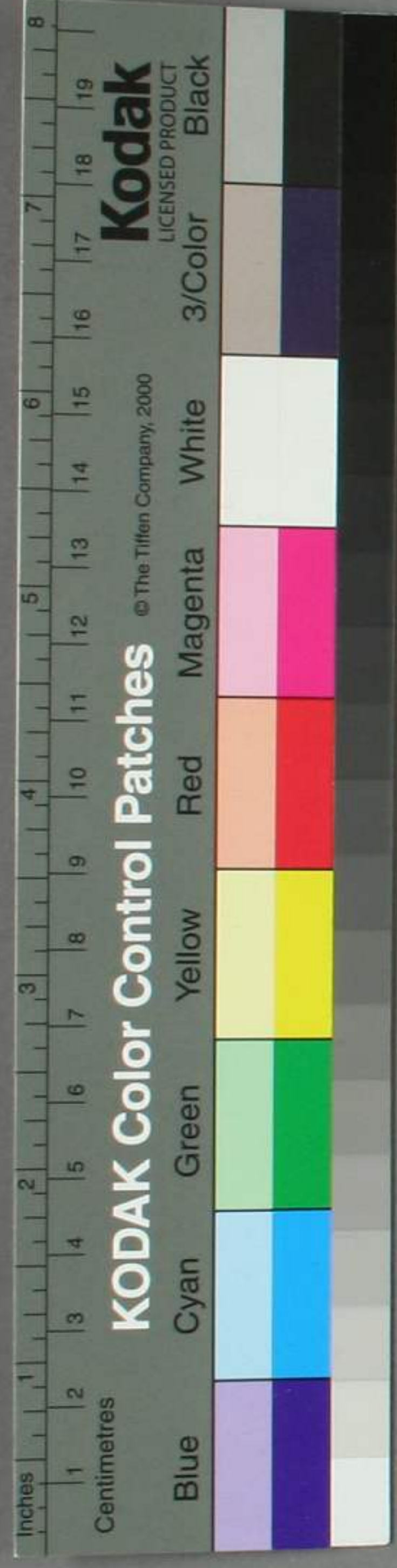




録名中書之介派
八宮良純親王
仁平



3122

中務親王三百首和歌
鎌倉中書王御歌

春七十首

井衣 後古今
三升
さけりともけりし河原松影ひくもや日の中をまよふ

首尾お叶安河克因作中歌被取成は神珠

松生作

衣三
東海のお坂山も実なれいつともて春のまねひ

井衣
つゝもり歌をとりて足門の山も野のまねひ

三升
立神もまね歌なり衣に神として話さるる

井
やま川の氷も実や越つて岩なり春風も

衣
去風を吹かす沙れとつゝもやいふまね

井
つゝもなり音とていふも音はまねのまね風

下句も優美よりいふも音のまね音より

作是味卿不思清しく同来と云

衣三
井師
光なき春影いふもていふも音のまね

如斯に奇なる音なる故不しと細作

衣三
井師
もとりかゝる音とていふも音のまね

は寫面白くもいふも杉木梅意年

かゝるもいふもいふも同く作らる

新師
奥山乃玄白雲
日ぬふまをれ
祿志のまき
常る

下句同前作

井阪三
つとむれ山のけの初夢は初よりまひぬる海まで
三升
井阪三
初夢の野山に雲消くいとむかふ朝日ぬる日にか
三升師

足^あ木の神よこた奇ハクモトウカサヨ〜

花柳全

井啓
三介
春之霜のそよ成はるも雪井よりたつてきたり
三介
をとり霜うめも煙立はるれぬあけ云のあけの
三介
み拂ぬ峯北山にもうとをいふ最そをさきむとの原
三十一
正上面に松重作

正上面之移重作

じう一燈^{さん}をきんふく海舟目以免つゝ字
 なりぬ。まは衆のこゝろに燈臺をき景
 氣浮眼作也

氣字眼作死

井九三
いふこと
首をなすに松浦海霧の神よと云風が吹
く有泉師の残るうすうめて霧はさる松浦海
霧のうすうめて霧はさる松浦海霧のうすうめて
霧はさる松浦海霧のうすうめて霧はさる松浦海
霧のうすうめて霧はさる松浦海霧のうすうめて

往事文浮眼

あやうのうれひこの曙よりとみよのふも湯の松

後為陳所

餘の事とて作詞其體以燒ぬかきとす
とは達者な事とて非美華麗と詞は

非華麗之詞以記

芳三
あひぬきをいかに梅うさうふ庭の云風

井家 續古今

ひとも人をもてやおのこめぬ梅の花のさくら

井家 三師

神白娘山終れ梅の花うつくしき云のこい

井家 三師

梅の花さくらうつくしき春のいふれぬ梅の接の

すもねつものね焼ぬうつくしの時と作

井家 三九

春のさくら梅の花うつくしき水端の梅の花さくら

随其具の如く意は死

井家

なまの河の春も昔の神も梅のさくら

神のわがまをうつくしきやうせん

井家 三九

山の端のさくらうつくしき春のさくら

井家 三九

おもしろ月川音のさくらうつくしき春のさくら

井家 三九

春のさくら梅の花うつくしき春のさくら

井家 三九

春のさくら梅の花うつくしき春のさくら

井家 三九

春のさくら梅の花うつくしき春のさくら

才高のさくら梅の花うつくしき春のさくら

井家 三九

浦名随珠のさくら梅の花うつくしき春のさくら

浦名随珠のさくら梅の花うつくしき春のさくら

井家 三九

春のさくら梅の花うつくしき春のさくら

井家 三九

春のさくら梅の花うつくしき春のさくら

春のさくら梅の花うつくしき春のさくら

しらひのうらみは

井九 佐保のまゝ衣のまゝもめとさるる

井九 本歌可謂云云 松の枝まゝまゝさるる

井九 此春雨賢、連玉、章人、と句定而様は、能慮難單作

井九 是又あゝの柳或神祇まゝ、時めけ事、座忘、

井九 能の池の境、柳原さす、に春、つと、ね、り、

井九 能の池の境、柳原さす、に春、つと、ね、り、

井九 能の池の境、柳原さす、に春、つと、ね、り、

井九 能の池の境、柳原さす、に春、つと、ね、り、

井九 能の池の境、柳原さす、に春、つと、ね、り、

井九 能の池の境、柳原さす、に春、つと、ね、り、

井九 能の池の境、柳原さす、に春、つと、ね、り、

井九 能の池の境、柳原さす、に春、つと、ね、り、

井九 能の池の境、柳原さす、に春、つと、ね、り、

井九 能の池の境、柳原さす、に春、つと、ね、り、

井九 能の池の境、柳原さす、に春、つと、ね、り、

井九 能の池の境、柳原さす、に春、つと、ね、り、

井九 能の池の境、柳原さす、に春、つと、ね、り、

井九 能の池の境、柳原さす、に春、つと、ね、り、

井九 能の池の境、柳原さす、に春、つと、ね、り、

井九 能の池の境、柳原さす、に春、つと、ね、り、

初ふ字字多ふ言も耳ふまひ流ん

九
師
揚
多
り
雲
の
衣
と
う
流
の
新
神
も
家
言
と
は

道代常事人

九
師
揚
多
り
雲
の
衣
と
う
流
の
新
神
も
家
言
と
は

返る感歎且千作

九
師
揚
多
り
雲
の
衣
と
う
流
の
新
神
も
家
言
と
は

九
師
揚
多
り
雲
の
衣
と
う
流
の
新
神
も
家
言
と
は

新古今或子内親王風ふりさきふりさきふりさき

作也

九
三
い
ふ
す
と
わ
ら
ぬ
や
う
な
揚
多
り
雲
の
衣
と
う
流
の
新
神
も
家
言
と
は

已上三首其與邊分れん

九
三
い
ふ
す
と
わ
ら
ぬ
や
う
な
揚
多
り
雲
の
衣
と
う
流
の
新
神
も
家
言
と
は

初ふ字字多ふ言も耳ふまひ流ん

九
三
い
ふ
す
と
わ
ら
ぬ
や
う
な
揚
多
り
雲
の
衣
と
う
流
の
新
神
も
家
言
と
は

同千信明人

九
三
い
ふ
す
と
わ
ら
ぬ
や
う
な
揚
多
り
雲
の
衣
と
う
流
の
新
神
も
家
言
と
は

毎三可握観人

九
三
い
ふ
す
と
わ
ら
ぬ
や
う
な
揚
多
り
雲
の
衣
と
う
流
の
新
神
も
家
言
と
は

初ふ字字多ふ言も耳ふまひ流ん

九
三
い
ふ
す
と
わ
ら
ぬ
や
う
な
揚
多
り
雲
の
衣
と
う
流
の
新
神
も
家
言
と
は

九
三
い
ふ
す
と
わ
ら
ぬ
や
う
な
揚
多
り
雲
の
衣
と
う
流
の
新
神
も
家
言
と
は

已上四首其與邊分れん

九
三
い
ふ
す
と
わ
ら
ぬ
や
う
な
揚
多
り
雲
の
衣
と
う
流
の
新
神
も
家
言
と
は

九師家
た 疆なふね とも 風は 花の 夢 遠く

四井三
とき 花の 夢 遠く 花の 夢 遠く

九夜
来い 花の 夢 遠く 花の 夢 遠く

三
あす 花の 夢 遠く 花の 夢 遠く

い 二首 故 不 子 細 作

三
あ 花の 夢 遠く 花の 夢 遠く

三
あ 花の 夢 遠く 花の 夢 遠く

三
あ 花の 夢 遠く 花の 夢 遠く

四
あ 花の 夢 遠く 花の 夢 遠く

井三
あ 花の 夢 遠く 花の 夢 遠く

井三
あ 花の 夢 遠く 花の 夢 遠く

井三
あ 花の 夢 遠く 花の 夢 遠く

井三
あ 花の 夢 遠く 花の 夢 遠く

井三
あ 花の 夢 遠く 花の 夢 遠く

井三
あ 花の 夢 遠く 花の 夢 遠く

井三
あ 花の 夢 遠く 花の 夢 遠く

井三
あ 花の 夢 遠く 花の 夢 遠く

井三
あ 花の 夢 遠く 花の 夢 遠く

井衣 善く歌ふは生れ来の松々浪あて春や川野人

夏三十首

井衣三 續定人 雲の井衣を山多れとて梯ふかうもの所春うれ

安河を松重山多の尾とぬ縁水意作

井衣 井衣の衣春とていへはけりよさうす卯花

井衣 井衣の衣春とていへはけりよさうす卯花

井衣 井衣の衣春とていへはけりよさうす卯花

井衣 井衣の衣春とていへはけりよさうす卯花

井衣 井衣の衣春とていへはけりよさうす卯花

井衣 井衣の衣春とていへはけりよさうす卯花

井衣 井衣の衣春とていへはけりよさうす卯花

井衣 井衣の衣春とていへはけりよさうす卯花

井衣 井衣の衣春とていへはけりよさうす卯花

井衣 井衣の衣春とていへはけりよさうす卯花

井衣 井衣の衣春とていへはけりよさうす卯花

井衣 井衣の衣春とていへはけりよさうす卯花

井衣 井衣の衣春とていへはけりよさうす卯花

井衣 井衣の衣春とていへはけりよさうす卯花

才二万又法梅の心ら仕めて程程とある

井弁
三
浦の音とや鳴る部とさう浦のみとるそ

浦の音とや鳴る部とさう浦のみとるそ

才二万とされても是れも必ありと程程と

浦の音

九師弁
三
あつたはぬ川津のみとるそあつたはぬ川津のみとるそ

足も暖熱く姿もい作れぬもろもろと

こそゆくとおほい

井弁
三
あつたはぬ川津のみとるそあつたはぬ川津のみとるそ

浦の音とや鳴る部とさう浦のみとるそ

井弁
三
あつたはぬ川津のみとるそあつたはぬ川津のみとるそ

井弁
三
あつたはぬ川津のみとるそあつたはぬ川津のみとるそ

井弁
三
あつたはぬ川津のみとるそあつたはぬ川津のみとるそ

足も暖熱く姿もい作れぬもろもろと

あつたはぬ川津のみとるそあつたはぬ川津のみとるそ

浦の音とや鳴る部とさう浦のみとるそ

才二万とされても是れも必ありと程程と

浦の音とや鳴る部とさう浦のみとるそ

冊三

師
 玄ふき沢の螢もやれあはれ一巻二巻は終る人

堂火亂飛實秋氣漸強勝上人

三ノ
東大台飛雲松氣洲強勝太
こかこみたきうんさきとあはりこみゆう泉師の
井衣や

非言語の度々

此は海川又なる人詠はけあまのゆふは海

いふゝあとのえきとふん珠璣室
作にや事とやふと人ハ侍ハぬやん

と
好
作

秋七十首

井九師

井ノ口
このぬきと家守と玉ふのすれお町は秋
行
弁三

詞のそはえこふとぞくも人

ことろへてこみ同出度かんくもの尚怪ふ所

九文師續

井
いねの露を降かき所のやのやの敷は杖やぬん

淡風亭の成奴のふきとるの物字はたやきぬ人

帝はさうとて段ぬの里残つゝぬせよと秋のきぬ流

今より秋の風

~~井長三~~

今師九
 井衣
 福の秋風吹そめまほしき
 今秋は神々多
 多

三
年
文
切
掌
月
入
如
川
流
浪
さ
そ
ろ
ろ
人

誰より身も心も成る心秋の夕れ萩の上風

とけむるを其の下級とむとひくふる其の自意

問 一 海より新なる花を露に漬ゆぬと

井三 必あめくちくもく 女師あられぬ庭の秋の静

心洞毎句珍重と雖もあは

九井 紅葉のふさふさ原に葉あはれさうな 句い成む

九三 洞あ秋の夕をうさかへは 秋の夜や洞あは

九井 夢と木と露とあはれ 秋の夜や洞あは

九井 秋あは秋の習う洞あは 秋の夜や洞あは

九井 初句少立耳は

三井 秋葉の花の難の極ありわが 野原に葉や雪あ

九井 秋葉の花の難の極ありわが 野原に葉や雪あ

九井 秋葉の花の難の極ありわが 野原に葉や雪あ

九井 秋葉の花の難の極ありわが 野原に葉や雪あ

九井 秋葉の花の難の極ありわが 野原に葉や雪あ

九井 秋葉の花の難の極ありわが 野原に葉や雪あ

九井 秋葉の花の難の極ありわが 野原に葉や雪あ

九井 秋葉の花の難の極ありわが 野原に葉や雪あ

九井 秋葉の花の難の極ありわが 野原に葉や雪あ

九井 秋葉の花の難の極ありわが 野原に葉や雪あ

九井 秋葉の花の難の極ありわが 野原に葉や雪あ

九井 秋葉の花の難の極ありわが 野原に葉や雪あ

九井 秋葉の花の難の極ありわが 野原に葉や雪あ

九井 秋葉の花の難の極ありわが 野原に葉や雪あ

くらきくひの秋の夕暮とつらうりてふ

日神は修光

九師歌
きさうあまの小船も哀しくも浪に渡れ秋の夕暮

三升
わが舟もあはれ舟ははたにも有る秋の夕暮

九師
わが舟もあはれ舟ははたにも有る秋の夕暮

九升
きさうあまの舟も哀しくも浪に渡れ秋の夕暮

足も次とてふ夕暮とつらうりてふ

由亡とて作

九師
きさうあまの舟も哀しくも浪に渡れ秋の夕暮

九師
秋風の木も哀しくも浪に渡れ秋の夕暮

三升
わが舟もあはれ舟ははたにも有る秋の夕暮

九師
わが舟もあはれ舟ははたにも有る秋の夕暮

三升
きさうあまの舟も哀しくも浪に渡れ秋の夕暮

九師
わが舟もあはれ舟ははたにも有る秋の夕暮

三升
きさうあまの舟も哀しくも浪に渡れ秋の夕暮

九師
わが舟もあはれ舟ははたにも有る秋の夕暮

三升
きさうあまの舟も哀しくも浪に渡れ秋の夕暮

4.

九香

弁

やの事ハ且ハ面白くも御事

夜已
新後振

弁三

かきこゝろありては

井九

九衣

存作

三

凡
新渡扶

井

津浦もは作死

九夜
弁
若ぬきーか国の川ぬみくささうのりな海月を
海月

是も初巧み力習極し作死

九夜三
弁
ふかき海ぬ石の溪谷晴く清くればき月とらに

弁
みゆーしこそんすまぬ浦のふかきこも秋の月

弁
のろろあきらめく人海は月よーさうあまれば月

いふ三船通憚作死

九夜
三師
さうかきさうの浦意果て桂月てまふのーむ

三
いふ海かきさうあまぬ秋の夜やーも初す月とら
湖上景氣招高懸人
并見更不飽人

才思あきらみす

井九
三弁
いふさうさうの煙と恨ぬけり塩屋あまれば秋の月

三師弁
えつる煙もーも成なるあまれば秋の月
此首首者月歌煙と與陸相似塩屋下句從可勝人

九夜
弁
さうかきさうはまもあまのーもあまの月とら

九師
あつる煙もーも成なるあまれば秋の月
殊銘心肝人

三弁
さうかきさうのすまぬさうさうの秋の月とら
横浪新腸二篇人

くさき面白く人ーもあまの月とら

将水過る

九三
弁
あつる煙もーも成なるあまれば秋の月とら
是又面白人

三衣
八重うすき
師弁

第三句不優作

井三郎
 九月九日
 秋月秋風有興有感
 秋風そ吹
 秋の月氣よく色は
 秋の風
 秋の月
 秋の風

續は撰よむも海に秋風とぞ思ふなり
あう人の衣うらむと作ら

つと川か風をし今よりや國のまぢい衣より
 井 後古今
 九 吉萩女をを置との秋風も花より衣とや接しむ
 三 師 已上三首より
 奔 女わとより任かり玉子のこの川とよ衣よりいふ

[illegible]

心と二首を
とある。

三
分

立田山町ぬさきれ秋風はもうけりふんをとり
衣

しと初束のふ乃このまはつひ伏見の書書は衣イヌあへて
井九

河あつお家のふいふまはつ夕日うつ詠みねの秋風
九三衣

こゝろわたりそりふそ町ぬなほよ極もぬ家今盛に
師奇

山名やうす作也

井三九
師衣
九師三
あゝ麻のむす時の山里に糸をふく人もあ
還は無念な能子細人
中前年(?)の果てに(?)

車馬之費殊心之術人

井三
師三
九井師
一
夜三
師三
井三
師三
九井師
一
夜三
師三

いと三首

井三
師三
九井師
一
夜三
師三
井三
師三
九井師
一
夜三
師三

井三
師三
九井師
一
夜三
師三
井三
師三
九井師
一
夜三
師三

井三
師三
九井師
一
夜三
師三
井三
師三
九井師
一
夜三
師三

井三
師三
九井師
一
夜三
師三
井三
師三
九井師
一
夜三
師三

いと三首

井三
師三
九井師
一
夜三
師三
井三
師三
九井師
一
夜三
師三

川原の

井三
師三
九井師
一
夜三
師三
井三
師三
九井師
一
夜三
師三

いと三首

井三
師三
九井師
一
夜三
師三
井三
師三
九井師
一
夜三
師三

井三
師三
九井師
一
夜三
師三
井三
師三
九井師
一
夜三
師三

いと三首

九段
明
乃
主
阿
山
風
今
朝
之
冬
野
之
花
み
易
換
成
所

三并

[illegible]

已上三百水陸之雪多見取之

新古今和歌集 卷之八 新古今和歌集 卷之八 新古今和歌集 卷之八

風情を深

花より人か小松うれの国と日新やとそふ嵐海に

心之憂懼

海子元屋・積・心・常・や・ぬ・海・ふ・ふ・ぬ・新・れ・玉・の

舟三
 奇九
 ぬき
 梅の花の枝より
 色を以て
 横を白き

三
雪のうらぬまに焼山やうたのうまぬ糖加無

井上森
りしむむり
四三師
己上ぬ首む二蛇人

德七十首

九段三
五のふし
弁師

上句 錦より只の親をや作らぬ

まいそひうゝ井花秋の色よゆゝ深き心感せし

三
おの
祐光をぬきし衣を
我より祐光にさす
詠と

中
九卷之
三糸師

これ又と句うらきてはやむ

幽山の奥より雲の情ぬ思ひの志は人も

人あまぬまのふくろと音はあまふ

九段三升

かのももろくはきりやきのなるわねのふいふ

白後撰 空相勝方如何

井九段

男もといとの杖のり先継うやあよと思そ先継

三升

うらもねとあき思いのりふれねねねとねね

九井師

秘とあね集来ふも多うふもせぬかひ死

下

の海士のこもりな来ふ秘と秘と秘と

已上首與時中定文又論實方人

秘

秘とあね集来ふも多うふもせぬかひ死

秘

秘とあね集来ふも多うふもせぬかひ死

秘

秘とあね集来ふも多うふもせぬかひ死

秘

秘とあね集来ふも多うふもせぬかひ死

井九

心隠金の里に恒海士もあこころ

三升

さうりね思ひあうふもせぬかひ死

秘

秘とあね集来ふも多うふもせぬかひ死

秘

秘とあね集来ふも多うふもせぬかひ死

秘

秘とあね集来ふも多うふもせぬかひ死

秘

秘とあね集来ふも多うふもせぬかひ死

秘

秘とあね集来ふも多うふもせぬかひ死

秘

秘とあね集来ふも多うふもせぬかひ死

秘

秘とあね集来ふも多うふもせぬかひ死

秘とあね集来ふも多うふもせぬかひ死

九三師并

かゝる思ひをたぬる所の桂月と秋のよき

衣三

夜つきの月をのちてかきまはさるる思

井衣三九弁

山ものよりなるかきまはさるる思

九

このよき思ひをたぬる所の桂月と秋のよき

井弁

かゝる思ひをたぬる所の桂月と秋のよき

衣三

夜つきの月をのちてかきまはさるる思

井弁

山ものよりなるかきまはさるる思

九

このよき思ひをたぬる所の桂月と秋のよき

井弁

かゝる思ひをたぬる所の桂月と秋のよき

三弁

道理を可なり

仍事申言上作

七指要父字餘事 倍々嬌く由亡父同し

強弁

師三弁

九三師

かゝる思ひをたぬる所の桂月と秋のよき

衣三

夜つきの月をのちてかきまはさるる思

井衣三九弁

山ものよりなるかきまはさるる思

九

このよき思ひをたぬる所の桂月と秋のよき

井弁

かゝる思ひをたぬる所の桂月と秋のよき

衣三

夜つきの月をのちてかきまはさるる思

井衣三九弁

山ものよりなるかきまはさるる思

九

このよき思ひをたぬる所の桂月と秋のよき

井弁

かゝる思ひをたぬる所の桂月と秋のよき

三弁

師衣

才男不優は死

井三師衣

幾秋の涙の露と拂ひつゝお里の神よ月とてつゝ

夜三

お里の我々くつ月影をこゝろとてつゝ

井三師

のささめけりひびくさきさきめいをきき

夜三

お里の我々くつ月影をこゝろとてつゝ

夜三

のささめけりひびくさきさきめいをきき

井三師

お里の我々くつ月影をこゝろとてつゝ

井三師

のささめけりひびくさきさきめいをきき

夜三

お里の我々くつ月影をこゝろとてつゝ

井三師

のささめけりひびくさきさきめいをきき

井三師

のささめけりひびくさきさきめいをきき

夜三

お里の我々くつ月影をこゝろとてつゝ

井三師

のささめけりひびくさきさきめいをきき

夜三

お里の我々くつ月影をこゝろとてつゝ

井三師

のささめけりひびくさきさきめいをきき

夜三

お里の我々くつ月影をこゝろとてつゝ

井三師

のささめけりひびくさきさきめいをきき

夜三

お里の我々くつ月影をこゝろとてつゝ

井三師

のささめけりひびくさきさきめいをきき

夜三

お里の我々くつ月影をこゝろとてつゝ

井三師

のささめけりひびくさきさきめいをきき

夜三

お里の我々くつ月影をこゝろとてつゝ

井九
三
ん夢のめしとほし今こころを福にし夢を衣

才三句を念ひ死

井九
三
店と夢めしうらなひとほしとほしにねむれさ

むりこの店に郭公なや又月いこ詠梅女

ふれ風なはふこ詠也亡き

井九
三
恨儀を衣ぬすて思ひこめ夢のかよひ

井九
三
夢めしうらなひとほしとほしにねむれさ

井九
三
思ひあはれ夢めしうらなひとほしとほしにねむれさ

ふと二首又情をぬ

井九
三
あはれ夢めしうらなひとほしとほしにねむれさ

井九
三
海のとほしとほしにねむれさ

井九
三
夢めしうらなひとほしとほしにねむれさ

井九
三
夢めしうらなひとほしとほしにねむれさ

井九
三
夢めしうらなひとほしとほしにねむれさ

井九
三
夢めしうらなひとほしとほしにねむれさ

ふと又情をぬ

井九
三
夢めしうらなひとほしとほしにねむれさ

きんはよもか候のすらは花あはれもききや
りふり月花不堪り計は神も庭のど
ころに花は水玉もさるる後い
さう候はあはれもさるるの候は
りともいふ目あはれけり
事あるにせ被作下は何事と思
ふもあはれもさるる思ふ
はれは度勅撰は力つきぬぬおほい目
つるに思ふなりは思ふ

てあはれも花あはれもさるる
れえはれもさるる思ふ

いふもさるる候はれもさるる
殿の清きあはれもさるる思ふ
さるる思ふの思ふ思ふ
らん思ふ思ふ思ふ思ふ
思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ

人時よまゝに
れんをれんと海に
あては
る

以朱書之者九
柔未同府被注之

此歌先年書畫之友為人收得矣之

同功續字書之

傾河

百七十九
新撰大異ナシ
明治四年七月十一日
読家

